



Title	多様性の中で育ち合う異年齢クラス保育
Author(s)	東, 重満; 中川, 絵理
Citation	子ども発達臨床研究, 12, 13-21
Issue Date	2019-01-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.12.13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72761
Type	departmental bulletin paper
File Information	060-1882-1707-12.pdf



多様性の中で育ち合う異年齢クラス保育

東 重 満¹・中 川 絵 理²

1. はじめに：美晴幼稚園の概要

美晴幼稚園の園長の東と申します。貴重な機会ですので、しっかり今日は報告をさせていただきます。美晴幼稚園の概要を説明します。札幌市内の豊平区にあります。利用定員 90 人の幼稚園で、満 3 歳児保育はしていませんから学齢は 3 歳、4 歳、5 歳の 3 学年の保育をしています。新制度に移行している給付型の幼稚園で、本来だと 107 名が上限なんですけれども、今年と去年は少し超過して保育をしている状況です。9 人の教諭が 3 クラス、3 名担任体制で保育をして、そのほかに教頭を含めて 3 人、フリーといいますが、支援をする教員がいるということです。

本園が月寒にありまして、セカンドスクールが平岸の 6 条 17 丁目の 3,000 坪ぐらいの敷地に段丘と菜園、そしてプレイホールがあるという、これも特徴としている幼稚園です。そういうことで関係性、直接体験ですとか心を揺らすような情動体験を日々大切にしている幼稚園です。

この 3 月で丸 2 年を終えますが、一昨年地域型小規模保育事業 A 型の 0-2 歳の乳幼児 19 名の小規模保育所も、先ほどのセカンドスクールの方の敷地の端っこの方でささやかに保育をしています。ただ、共に保育をする場面がほとんどありません。幼稚園の子どもがプレイホールガリバーの方に遊びにいったときに少し交流をするという。ちょうどお散歩の時間とも重なったりするので、そういうような交流しか今のところはできていないということです。

2. 美晴幼稚園草創期の子どもの世界

自園と私の自己紹介にかけて、少し宮原洋一さんのスナップ³を紹介したいと思います。私も昭和 39 年（1964 年）生まれで、この幼稚園も 1964 年にできた幼稚園なんです。これは私です（写真を見ながら）。50 年前の私で、たぶん美晴幼稚園に通っていた当時の年少か年中ぐらいのときだと思うんですが。

先ほど吉田先生がおっしゃったように、当時の地域社会だとか幼稚園も保育園もそうでしょうし学校もそうだと思うんですけども、非常に緩やかでいろいろなつながりがあって、多様な世代間交流がある中で生活をしていましたし学んでもいた時代だったんですね。それをノスタルジックに振り返って、そこに戻れということではないのを最初にお話したいですが。

少し（宮原洋一さんの）スナップを流していきますけれども、危険な場所であったりこれはバラ線の中に

¹ 美晴幼稚園 園長、本論文の 1.～5. および 7.～8. を担当。

² 美晴幼稚園 教頭、同じく 6. を担当。

³ 宮原洋一（2006）もうひとつの学校：ここに子どもの声がある。新評論。

入っていったところ、草野球に興じる子どもたちがいたりだとか本当に危ないような。さっきの段ボールハウスみたいなのも自分で勝手に拾ってきて作り、基地を作ったり火遊びもしていただいでしょうし勝手にリヤカーの行商の方の手伝いをしたりだとか、差別用語かもしれませんがこちらではちんどん屋さんといって、商店街の開店だとか遊興場の開店のときには宣伝をするような人たちの後を勝手に付いていたりだとか。

宮原さんの写真集は西東京から川崎をフィールドにした写真集なんですけれども、私は札幌生まれ札幌育ちですがほぼ同じような状況の中で生活をおこなっていました。資料にも載せた今日のテーマと関係する写真と私が好きな写真、これはたぶんどこかの空き地の脇の道で、かすりを着たおばあちゃんが、これは左手に持っているのは剣先スコップなんですよ。子どもたちの砂遊びとか泥遊びを緩やかに見守っているような風景があったりだとか、雪国の札幌には路地がないですけども、路地でおじいちゃんやおばあちゃんが小さな子どもたちと過ごしている、遊んでいるのを見守っていたりだとか。

こっちの写真、我々のところは地域の児童公園といって子どもたちが遊ぶ公園だったんですよ。放課後は本当に子どもたちであふれかえっていて自然に世代間交流があつて。こういうふうにみそっかすの子どもたちがお姉ちゃん、お兄ちゃんの中で遊ばせてもらって、伝承遊びやらルールのある遊びやらゴム飛びだとかというのを女の子たちがして、それがまたいずれお姉ちゃんとして育っていくという世代間循環という交流がある中で、普通に自然に育っていった、育ちあがっていったというような時代があった。

危険回避能力みたいなものも滑り台の上から飛び降りる先にマットや布団を敷いていたりだとかですね。これは今でも東京にあるそうですけれども、恐竜公園の高さが一番高いところだと4メートルぐらいあるそうなんですけれども、そこから飛び降りることができたりだとか。「ドラえもん」の中にある世界が、我々の本当に育ってきた世界だったという。

これは玄関先にゴザをひいて、ちっちゃな子どもたちが遊んでいる。誰も大人を見かけないわけですけども、何かあったら家に入っていって、「おばちゃん助けて…」と声を掛ければすぐ助けにきてもらえるのというようなところで遊んでいた。「あつ、この風景は私の子どものころの風景だな」と読まれる方と、「これはどこの国の話なのか」と読まれる世代が分かれるかもしれません。

これは子どもが勝手に、どこかの工場の裏か何かで犬を飼っているというところですよ。責任もあるでしょういろいろな問題はあるでしょうけれども、来週もう1匹子犬が来るみたいなことがブロック塀に書かれていたりするような、この様な地域の中で我々は育ってきたわけです。

3. 学校の狭義化

いつでも友達がそばにいて、その中で小さな子どもの社会が形成されていたわけなんですけれども、いずれこのようにですね、パーティションとか、そのバリエードの先はスクールゾーンのように時間を区切られた遊び場になっていく。要するに、車が入って危ないだとかいろいろな状況になってきたものですから、道路を開放して子どもの遊び場にしているんですけれども、子どもは遊んでいない。子どもにとってやはり魅力的な場所ではないとそのような安全を確保してもここでは遊べないような、地域空間になってしまうということなんだと思います。宮原さんは、こう総括しているんです。

もう1つの学校が喪失していくのが、交通環境であつたり地域社会の変化であつたり訴訟社会で、空き地を緩やかに開放していた会社や企業はそういうことがままなくなる。公園の使用も、いろいろな制限が付く公園になってしまったということがあるんだと思います。子どもが育つ場が限定的になってしまったのに、実は学校自体も狭義化してしまって、受験優先の機能化、効率化を図っていく中で落

ちこぼれのようなもの。我々は“4.6世代”⁴ですから、一番学習量と厳しい教科書の中で学校教育を受けてきた世代ですけれども、私たちのすぐ上の学年から共通一次世代に入っていきますから、当然高校進学からそういう構造の中に追い込まれていく。

実はこれには矛盾があって、子どもの育つ場が地域でなくなって行って学校にいろいろな機能が求められていったのに、実は学校の方が狭義化してしまったという。その中で子どもは、どうしても息苦しく毎日を過ごさなければならなくなったということだと思います。

そのような状況の中で、私は実は学部教育で教員養成教育を受けてきていないので教員免許も保育士資格も持っておらず、27歳のときにこの世界に入ってきて、実は幼稚園の存在そのものを批判的に見ていたのかもしれないところがありました。33歳で園長になるころに社会の中にあって幼稚園ってどういうものなのか、アイデンティティ自体をどうとらえればいいのかということの葛藤があったような気がするんですね。

4. 美晴幼稚園の問題意識

当時の幼稚園は家庭環境的にも経済的にもいろいろな面で恵まれた家庭の子どもたちが通う施設でありましたので、一定条件はもうすでに守られている子どもたちが多かったんですけれども、現代の貧困、つまり経済的な貧困という狭義のものではなくて、子どもの発達支援という面で本当に豊かな環境だったのかなというのは非常に疑問に思っていました。

それで、その学齢別の集団の保育というものの限界みたいなものを感じて、子どもにとって豊かな場になる幼稚園になるためにはどういうものが必要なのかなということを、試行し始めたということがありました。

そのころちょうど中央教育審議会が、初めて幼児教育部会を立ち上げて答申をするという。これが後のさまざまな幼児教育行政に影響していくわけですが、一番私が危機感を持ったのはここなんですよね。近年の子どもの育ちが何かおかしいということの指摘が、このときに初めてなされたというのが私にとってはショックでした。

文部科学省、国がいろいろな調査の下に分析をしたのだとは思いますが、最近の子どもたちの育ちの形がゆがんでいるんだということの前提に立って、これからの幼児教育を考える6つの指摘がありますけれども、それぞれもっともだなと思いますが、その視点に立ったのが非常にショックではありました。

そのころの私を含めて、美晴の保育者の問題意識としてこんなものがありました。公園デビューが社会問題になっていました。今は死語になっていますよね。先ほど吉田先生がおっしゃったように、今は幼稚園でも保育園でも地域の公的な機関でもさまざまな子育てのサークルの場が用意されているので、公園に子どもを連れて行くことの緊張感だとか、どうお母さん方や子どもたちの集団に入っていけばいいのかということの、ストレスがなくなったのかもしれませんが、それが本当にいいことなのかどうなのかということはあるかもしれない。でも、いずれにしてもそのころは、公園デビューということがもう社会問題化しているような時代でした。

家庭と地域の教育力に先ほどの文科省じゃないですが疑問が投げ掛けられていて、生活と発達の連続性、一日の生活時間もそうですし、縦軸の幼児期から小学校に向けてのその発達の連続性みたいなもの

⁴ 昭和46年改訂の学習指導要領世代という意味。

を、どう担保するのかというのが問題意識としてありました。学校教育・保育がはぐくむ資質・能力と、子どもの実態にさまざまな意味で齟齬、矛盾が生じている。

最近は発達障害という言葉が一般化してきましたけれども、何か集団に適應することに難しさを感じている子どもや親が増えてきつつあるのに、幼稚園や保育園がなかなかその受け皿というか居場所になっていないという矛盾。学校教育・保育の構造があまりにも単純化・標準化してしまって、息苦しくて子どもの生きる形がゆがみ始めていると感じているわけです。

5. 美晴幼稚園のささやかな挑戦

(1) スパイラル状の教育課程

そこで美晴幼稚園でささやかな挑戦というか、取り組みをしていきました。子どもの集団と遊びの構造を少し崩して、柔らかにしてみたらどうなのかな。今でもまだ崩し切れてないところはあるのかもしれませんが、そういう取り組みをしてきました。

その中で、教育課程を子どもの実態から紡ぎ出して多層化する。実はこういう形になっているのが今の美晴幼稚園(図1)。第1期から第3期まで1周して1年間のというのが、3学年スパイラル状に構造化されていると我々はイメージとして持っていて、異年齢クラスで3・4・5歳が共に生活する場面では、並行して1年間ぐるっと動いているというイメージを持っているわけです。

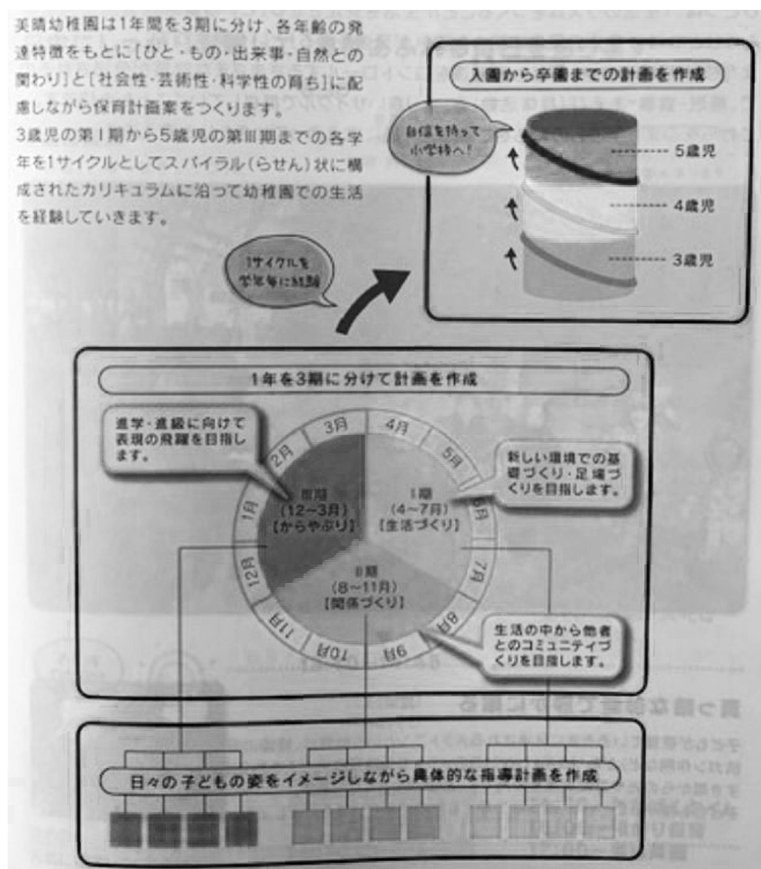


図1 美晴幼稚園の教育課程 (2018年度ポリシーブックより)



図2 3歳児の教育課程

それを編成し直すときに、今のように大きな紙にポスト・イットでといったスマートなスタイルではなく、図2は第3版か第4版ぐらいの教育課程（3歳児）で、幼稚園に残っている最終版だと思うんですが、子どもたちのこの時期の育っている姿というものを一つ一つ書き出していった、更新していった教育課程を紡ぎ出していったわけです。それを紡ぎ出さないと子どもの育ちの実態に合ったカリキュラムを編成できないと考えましたし、世代間循環を生むような異年齢構成での保育というのは実現できないと考えていました。

異年齢クラスを生活のベースとするので、子どもの環境は多様であることを前提として編成し生活を見直していった、子どもの発達の順序と方向性の秩序は踏まえながらも発達モデルにあまりとらわれ過ぎずに、一人一人のありようを尊重することに取り組んでいったということになります。

(2) 教育課程と保育形態の見直し

具体的には2000年から保育形態を見直しました。従前の学齢ベースのクラスは5クラスで、3歳児クラスが1クラス、4歳児と5歳児が2クラスずつで5クラスありました。その学齢別のクラスの他に異年齢混合クラスを編成して出欠簿も用意をしていました。異年齢のクラスで生活する日や遊ぶ場面と、全園保育と当時は呼んでいましたけれども、クラス関係なく園全体で、子どもたちが遊びたい場所を主体的につくっていった、もちろん教師が事前に環境構成もするんですが、つくって遊ぶという日を月に数日設けるといふかたちで、遊びとその集団構成を少し崩してみようという保育に3年ほど試行的に取り組んでみました。

2003年に先ほどのセカンドスクールの遊び場も整備しながら、2004年から新しい教育課程で保育を

始め、クラス編成も表と裏を入れ替えるということで生活のベースを異年齢のクラスで行い、活動や保育の遊びの内容に応じて学齢別のグループであったり、あるいは後ほど中川(教頭)の方からお話をしますけれども、斜め割りのような興味や関心に基づいた集団構成の中で保育をするということになっていくわけです。

その中で大事にしたかったのは、実体験と心を揺らす情動体験はいつも大事にしようということと共生と対話、これは子ども同士もそうですし我々保育者でもそうですし、自然や物、事を、出来事との対話を大切にしようとして保育を進めていきました。

そのときにちょうど北大に当時にいらした石黒先生、今日は藤野先生がいらっやっていますけれども、放課後保育の中でプレイショッパをしながら遊びのつくり方、大人のプレイリーダーのかかわり方についても共同研究、実際にプレイショッパを進めながら3年間ほど継続して取り組ませていただいたのがちょうどこの時期になります。それでは中川先生の方から実践の報告をさせていただきます。

6. 美晴幼稚園の保育について

基本的に、異年齢の〈クラス〉で活動を行っており、活動によって、学齢別の〈グループ〉で活動を行っています。その他に、全園児で枠組みのない『ちゅーりっぷ』の活動、毎年11月に行っている『ワクワクひろば』という、大きなお店屋さんごっこのような行事の際に分かれる〈チーム〉で活動しています。保育者はそれぞれクラスに3名、グループにも担当が3名、チームにも約3名配置されており、1人の子どもに対して異なる集団の中で多くの保育者の視点から子どもたちのいまの姿、成長を支えています。

(1) 異年齢クラス

基本的に毎日異年齢のクラスに登園し、朝の会をし、その日の主な活動を行います。保育室の環境構成では、座席やお道具箱・コート掛けのロッカー、スモック掛けのスタンド等は、年少児と年長児が隣または上下になるように構成されています。

新入園児は初めての集団生活で、初めての場所・人との出会いがあるので、まずは幼稚園という場所に慣れて、先生に安心感を持てるように私たちも保育を進めてはいますが、常に1人の子と一緒にいることはできません。そこで新入園児は優しく寄り添ってくれる年長児にも次第に安心感を持つようになって、このお兄さん、お姉さんと一緒にできそうだと感じるが増えたり、憧れを持つことで自分もやってみたいという姿が自然と見られています。

年長児は、自分自身も初めて幼稚園に来た時に同じようにお兄さん、お姉さんからしてもらったことをしっかり覚えており、はじめはお手伝いし過ぎてしまうことやどう接したらいいのか分からないという姿もありますが、次第に、自分は一番年上の“年長児”という自覚が芽生え、頼られることで責任感が生まれ、その姿をさらに認められることで自信につながっていきます。このように異年齢保育の中では助け合い、思いやる気持ちが自然と子どもたち同士で広がり受け継がれていっています。

(2) 学齢別グループ(グループ活動)

週に1回英語あそびがあるので、基本的には週に1、2回グループ活動を行っています。また、運動会、発表会、そのほかに年長児のみの園外活動もありますので、時期によってはほぼ毎日グループ活動ということもあります。

グループ活動では、グループ担当の先生の3名中2名が他のクラスの担任で、保育室も移動という形になりますので、そのような環境の変化にすぐに慣れることが難しい子もありますが、回を重ねていくことで保育者やお友達に安心感を持てるようになり、グループではグループの楽しさを見つけることができています。

また、学齢別で過ごす中で、大切なことは、けんかをする事だと感じています。異年齢で一緒に生活をしていると、年長児が自分の気持ちをぐっとこらえてしまう場面もあります。自分の思いを100%出して、互いに気持ちがあつかるほど伝えようという経験をこのグループで経験していき、相手の気持ちに目を向け、気持ちに折り合いをつけていくなど心の成長につながるように保育をしています。

また、イメージの共有という点でも同い年のお友達と同じ経験を積み上で、例えば、園外活動に出掛ける時も、出掛ける前・後のイメージを共有することでより当日が意味のあるものになり、“一緒に”という点で子どもたちの大きな自信につながり、その積み重ねが仲間意識にさらにつながっていると感じています。

グループ活動中の年少の男の子と女の子のやりとりで、靴がうまく履けないと泣いていた女の子を男の子が手伝ってあげる姿がありました。ですが、この男の子も入園当初から自分は靴が脱げない、履けないということでよく泣いていた子でした。4月からたくさんのお兄さん、お姉さんに手伝ってもらった経験で、自分でも靴が履けるようになったということが自信につながって、自分と同じように困って泣いているお友達を見て思わず手をかさずにいられなかったのだと思います。その異年齢での関わりが、学齢別の関わりの際に見られています。

(3) チーム・全園児

朝と帰りの自由あそびの時間は毎日全園児と一緒に遊んでいます。一日全園児で遊ぶ『ちゅーりっぷ』の活動を月に2～3回、多い時は5日間通して行っています。場所は主にセカンドスクールのガリバーで、この日はその時々の子どもたちの興味や関心、子どもたちがしたい遊びを事前に聞き、保育者で最低限のものを用意し、子どもたちが主体となってあそびを作り上げていく活動になっています。

ガリバーの森の中に段丘があるのですが、上り下りする際に、目の前や後ろに安心できる存在がいたり、憧れの、お手本になるお兄さん、お姉さんがいてくれることが大きく活動の幅を広げ、挑戦につながっています。

『ワクワクひろば』という行事では、約2カ月間かけて子どもたちが作りたいものを色々出し合い、例年だいたい3つぐらいのチームに分かれますが、自分が取り組みたいテーマのチームに分かれ活動をしていきます。全て子どもたちが主体でその年によってどんなテーマになるか分かりません。必ずチームごとにイメージを広げたり、深めるために一度園外にお出掛けをしますが、その園外の場所も、チームの人数も学齢もまったく均等ではありません。

しかし、同じ興味を持つ集団ということで、2カ月間は長いようであつという間に過ぎ、子ども同士新たなお友達との関係を築きながら、当日お客さんとして来てくれる保護者にどうやったら楽しんでもらえるのかということを考えながら活動しています。自分のためだけではなく、自分以外の誰かのためにということは、異年齢の関わりの中で日々培ってきていることと大きくつながっていると感じています。

昨年度の「ゆめ」というテーマで行ってきたチーム活動では、子どもたちから恐竜の町・ミニチュアの町・アイドルのステージ等作りたいもののアイデアがたくさん出たので、1つの「ゆめ」というテーマにまとめました。

みんなでたまごを作って、子どもたちは「ゆめたまご」と呼んでいます。みんなで育てて、大きな恐竜のお母さんが出てきたり、赤ちゃんが楽しめるようにみんなも一緒に恐竜に変身して遊んだり、考えたストーリーに沿って2カ月間取り組んできていました。

年長児の中には恐竜のかぶり物をして、なりきることに恥ずかしさがある子どももいましたが、みんなで考えて作り上げてきたということもあり、年少中児がなりきって楽しむ姿に影響を受けて、年長児も一緒に楽しむ姿がありました。

このように異年齢の中で年長児に助けてもらった経験や同年齢で何かを一緒に達成した経験が、誰に対しても困っていたら助けたり等、当たり前さまざなな場面でその姿にあらわれています。

『ちゅーりっぷ』の活動での年長の男の子と女の子のやりとりを紹介します。男の子は年少の時から1秒でも長く遊びたいという子で、あまりほかのお友達のお手伝いなどはしない子でした。女の子は言葉がほとんどないお友達で、ガリバーの段丘を降りれずにいた時のことです。私もそばにいて、私が手を引くと嫌がり、しばらく15分ほど上にいました。その時、この男の子に声を掛けると、手を引いて女の子のペースに合わせ、ゆっくり時間をかけ一緒に下りてきてくれる姿がありました。実は、この日だけではなく、その後も先生が気付かない場面でも、この女の子のことをすごく気にかけてくれるようになり、この女の子も彼のことをとても信頼している姿があり良い関係性が結ばれました。

(4) まとめ

異年齢保育を行う保育者として子どもたちの成長を見取る際に、縦・横・斜め割り（異年齢クラス・学齢別グループ・チームや全園児での興味や関心に応じた活動）という様々な場面で子どもたちの異なる姿を捉えることができ、職員間でこの場面ではこんな姿があったということをたくさん共有できることはとても大きいと思います。自分の目では見つけることができなかったその子の成長を細かく見つけられるということ、さらにその子を取り巻く人的な環境が違うことで、その子どものあらゆる面を引き出せるということにこの縦・横・斜めの集団の保育を通して気付くことができました。

また、子どもたちが“助ける”ということを実はただ代わりにやってあげるということではなくて、相手の気持ちを考え、相手のために何が助けになるかということ、日々の関わりの中で失敗しながら気付いている姿もあります。たとえば、身支度がうまくできなくて泣いている子に、いつまでも代わりにやってあげることが本当に“助ける”ということなのか。気づききっかけは、保育者の「今は見ててあげてね」の一言だったのかもしれませんが、その子のために“待つ”だったり“励ます”という選択を子どもたちが考え行動する姿に、改めて異年齢の子どもたちの関わりが、言葉だけでは伝わるのが難しい気持ち、心の成長に大きく影響しているかを日々実感しているところです。

7. 2004年以降の変化

最後に、実際にどう変化をしてきたかという今の実感をお話したいと思います。当然規律や平均化は緩みます。ノイジーになってきたりすることもありますし、集まるような場でいろいろ飛び出していったりだとか待てない子どもというのは出ていることもあるんですけども、具体的に姿、行動がモデルや役割を子どもの中で生んで、成長の振り返りがいたわりやお世話をするという感情と行動を促します。

「あっ、保育者がしてね」ということではなくて、その状況をやはり感じ取る力は子どもの中にしっかり育っています。幼稚園では最年長の年長青バッジになったときに、そのバッジを付けるその意味が

我々大人が思っている以上に子どもにとっては非常に大きな意味があって、その成長の自覚につながっているということがよく分かります。生活や遊びの伝承が子ども同士で自然となされていくんだと考えますし、世代間循環は緩やかですけれども確かに実現しています。

先ほどの教育課程でご覧いただいたように、段階的な発達の連続性に遊びや学びの内容を系統的に位置付ける、といったようなきっちりとこの発達段階（時期）だからこの学びというような指導計画やカリキュラムは実現できませんけれども、美晴の場合は4人に1人から3人に1人が合理的配慮を必要とする子どもたちなので、1年遅れの教育課程の中で発達を遂げている子どもたちもいますし、もう少しずれているような子どもたちも、さまざまな多様性がある育ちをしているんですよね。そうするとまだらなその発達の仕方、プロセスみたいなものがやはり保障されていて、一見不規則には見えるんですが、共同生活、集団生活の中でも育ちや学び合いというのは十分可能だということが言えます。

学齢別クラスは発達の近い子どもたちの集団なので、遊びや生活の中で学習の効率は担保されるのかもしれないですが、逆に子どもに取ってみるとストレスになりかねないということは十分あると思います。毎日の生活、遊びと発達の原則が、先ほど吉田先生と家村先生のお話を聞いていて重なるなと思ったんですが、原理原則は「競争」から「協調・協力」に変わっていきます。そのことが子どもの遊びの充実や学びの進展にも、大きなその原動力となっていくというのはよく分かります。

8. おわりに：今の美晴幼稚園

今の美晴幼稚園はこのように言えるかなと思うのは、かかわり、取り組みのプロセスを大切にしている文化が醸成されていて、今は新しい幼稚園教育要領の中で伝え方、保育の公開みたいなこともいわれていますけれども、保護者に理解していただくための手段、手続きというのは丁寧に行っていないと、どうしても結果や出来栄に大人は気持ちを動かされやすいので、今の子どもたちがどういう成長の過程ににいるのかということをしっかり伝える手続きも非常に重要になってくると思いますし、その文化が醸成されてきているなと思います。

その中で保護者、もちろん保育者ですが、子どもの遊びに対する理解と成長発達に対する理解がはぐくまれていて、見守るだとか子どもがどう育ち合うのかということの理解が広がり深まっていると考えています。子どもの多様性を尊重する意義が我々というよりも保護者、あるいは美晴幼稚園を選択される保護者の中に定着してきていると感じています。

それから何よりも以前に増して、合理的配慮や教育的に特別な支援を要する子どもたちと保護者に選択してもらえる幼稚園になってきている。この15年ぐらいの歩みの中で、我々は集団保育なので誤解を恐れずに言うと、ある一定の割合でなければお互いの育ち合いというのが保障できないという、その危機感も感じてはいますが、やはりほかの幼稚園、保育園さんでは受け入れてもらえない子どもたちの居場所、遊びや学びの場所ということとして、美晴幼稚園を選択してくださる保護者や子どもが着実に増えてきているということは、幼稚園の保育の充実が図られているという1つのバロメーターになっていると私たちはとらえているところです。